吉野弘の詩について

— 国語教材としての考察 —

野村由香理

第一章 吉野弘の詩の特質

この章では、吉野弘が詩を書くようになったきっかけ及びその過程から、吉野弘の詩の特性ともなっている二点、一つは、なぜ「八生」をうたっていくようになったのか、もう一つは、自分を語らないと(注1)言われているが、作者自身の意図とところはどうかについて考察を加え、吉野の詩の特性について論じていくことにする。

吉野の詩作の始まりは、昭和十八年に帝国石油会社に入社した年からである。

当時十七歳の吉野は、職場の人に高村光太郎の詩集『道程』を見せてもらい、「これなら僕も書ける」と思って、社内誌に詩を書いたのが、その始まりであると彼は語っている。

以後、第二次世界大戦の影響、また戦後すぐに起こった石油会社

内部での首切り闘争（この時吉野は、労働組合の執行部にいたため会社の上部の首切り側と闘争する立場にあった。）の過労がたたったの発病のため、数年間は詩作を休止する。

発病した年は昭和二十四年、吉野二十三歳の時で、以後三年間の療養生活に入ることになるのだが、この時期が吉野にとって、休止していた詩作活動の再開となるわけである。療養中、結核者向けの同人雑誌『保健同人』に投稿したり（これはすぐ入選したためやめてしまったらしいが）、病院内で、富岡啓二という、当時『詩学』に投稿し有望視されていた詩人と知りあったりしたことが、吉野をいっそう詩作へと触発していったもののように思える。

そして、吉野自身特に意識して書こうとしたのは、昭和二十六年、吉野二十五歳の頃からである。

二十四年の九月に肺結核を発病して以来、療養生活に入った吉野

は、二十五年の六月、七月に、東京小岩の或る病院で胸郭成形手術を受けて右側の肋骨六本を切除し、二十六年の三月には、左側も切除される予定だったが薬の服用だけで快方に向い、八月に退院して帰郷、元の職場に復職してしばらく半日勤務、二十七年に入って全日勤務という過程をとるわけであるが、これを考慮に入れると、吉野が本格的に詩作を開始した時期は、病気が快方に向い、退院して社会生活に復帰し始めた頃であると言ふことができる。

療養中には、萩原朔太郎の『古典鑑賞——俳句、短歌』を読み耽り、退院後投稿を開始しはじめた吉野の作品は、まず『詩学』において認められるのである。昭和二十七年六月号の『詩学』の「詩学研究会」（投稿欄）に「爪」が入選一席、同年十一月号においては、「I was born」が入選二席となっている。

以後昭和二十八年には、川崎洋や茨木のり子の勧誘で、同人詩『權』に参加し、現在に至っている。

これはなんと言つても、吉野が詩作を開始しはじめるようになった時期及び背景に負うところが大きいと思われる。

吉野が本格的に詩作を始めたのは、前述のように、肺結核を発病し三年間の療養生活を終えて後の頃からである。この三年間の療養生活で吉野は、自分の生というものを改めて見つめ直し、退院して帰郷した後には、生に対する一つの決意を生みだしていったように思える。つまり、何としても生きなければならぬという確固とし

た決意である。

吉野自身の語るところによると、作者は八生き残るVという意味の体験を、それまでに三度繰り返してきたことになる。

一度めはまず、戦争においてである。吉野は終戦の前年にかぞえ十九歳となり、日本で最後の徴兵検査を受け合格している。そして翌昭和二十年の終戦の日の五日後には、山形三十二連隊へ入営することになっていたのである。このように、まず行くはずの戦争に行かずじまいで終わっているのである。

二度めは、戦後すぐに起こった石油会社の首切り闘争においてである。このことについては、この章の始めでも触れたが、この時吉野は労働組合の執行部にいて、会社の首切り側とやりあう立場にいたわけである。そのために会社からはならまれ、当然、吉野自身も首を切られる危険性があったわけである。それでも吉野は無事やめさせられることもなく、勤続となるわけである。

三度めは、労働組合運動での過労がたたって肺結核を発病し、三年間の療養生活をおくったが、快癒し社会に復帰できるようになったことである。

このように、戦争で死ぬはず、労働争議でもやめさせられるはず、結核でも死ぬはずだった吉野が、三度の試練を乗り越え、それでも尚かつ八生Vを保ち続けてこれたことに対する感慨の深さから「何としても生きなくてはならない」という決意をしていったことが、

吉野の詩作に対して、そして全てを包括して言えば、△生▽に対しての肯定的な姿勢へと繋っていったものと思える。

このように、吉野が△生▽をうたっていくようになったのは、以上のような背景があったためであろうと考えられるが、逆の視点から論ずれば、△生▽を考えさせる時代背景ないしは、体験が重なったためとも言える。

次は、吉野は大岡信によって「自分を語らない詩人である」と評されているが、吉野自身の意図するところはどうかにかについてみていくことにする。

大岡は著書『現代の詩人たち△上▽』で、次のように述べている。自分および自分の周囲を執拗に、しかも可能なかぎり正確に、観察し、それによって自分の位置を、というより自分の重心を、ひとつの現実的構図の中で確保していくと努める人が、自分を語っていないとすれば、それは奇妙なことではないか。いやそれ以上に、何か大きな問題がひそんでいることを暗示してはいないか。

吉野が、「自分を語らない詩人である」と言われたら、確かに小首をかしたくなる場所がある。実際、吉野ほど自分及び自分の周囲にその題材をみいだしている詩人は少ないと思われる。しかし、大岡にこう評されるのもうなずける場所がある。実際、吉野は、その作品において「自分は」と語ることが少ない。自分をも含めて他

人のこと、或いは他者のことをうたった詩が殆んどである。

この大岡の吉野弘の詩に対する論文は、一九五七年、第一詩集『消息』が出版された年のものであるから、当時の吉野詩評と言うことができるが、『消息』以後も吉野は一貫して、他者に題材をおいた手法をとり続けている。

この自分より他人のことを語るゆえんは、多分に吉野の詩を書くようになっていった背景におうところが大きかったと思われる。

第一詩集『消息』が書かれた背景には、労働争議での苦い経験が深く根ざしている。他人のこと、もしくは、労働者階級、小市民階級の人々が会社生活によって人間らしさを失うことの苦しみ、また反抗を試みても同じ場所へ戻るだけの繰り返しによる虚しさ、同じ境遇にある吉野にとっては、痛いほどに感じ得たのではないだろうか。そしてその苦しさや虚しさを、自分の中にあいまいにしておくことに耐えきれず、それを書いてはつきりとさせることによって、氣を楽にしていこうとしていったところに、吉野の詩の出発点があるようである。これは、吉野自身が語っていたことでもあり、現在まで一貫して吉野弘の詩の底流をなしているものである。

「自分のことだけでなく、普遍的なものへと移行していくときに書きたくなる。人間全体を包むものが書きたい。」「おせっかいなところがあり、人のことに解釈を加えたり、参加していくところがある。」と語る吉野、ここが、大岡のように△私は▽と語る詩人と

つては、「自分を語らない詩人」ということになるのであろう。いわば吉野は、自分自身の感情を吐露するより、他人から共感を得ることに救いを求めている詩人と言つことができる。

最後に、吉野弘の詩の特性について、以上述べてきたことや、作者自身とのインタビュアーによって得られたことから、次にまとめていくことにする。

まず第一に、吉野の詩の根底にあるものは、自分自身の生い立ちの貧しさから向上しようとする意識である。吉野は、「貧しさという下のランクに位置している者は、変に建設的になるところがある。」と語り、これを「貧乏人の感受性」と名付けているが、この言葉が示唆しているように、吉野の詩には、常に上を向いていこうとする意識の底流がある。つまり吉野流に言わせるところの「上昇感覚」なのであるが、この「上昇感覚」が、吉野の詩の特性ともなっているのである。

戦後の混乱で困よりも自分の生き方が大切だと感じ、自分を再組織していくこと、つまりは詩作をしていくことが、吉野にとってまぎれもない上昇の感覚となるのである。作品「奈々子に」にしても「I was born」にしても、作者は対象を意識しつつも、常に自分に向かつて言っている。つまりは、その対象の中に自分を置いているのである。

たとえば「奈々子に」の中の次の一節、

ひとが

ひとでなくなるのは

自分を愛することをやめるときだ

は、自分の娘奈々子自身に語りつつも、自分自身に向けて発せられた言葉である。人が生きていく中で、およそ誰しもが免れることなく出会うところの悲しみやつらさ、それに屈することなく常に上昇しようとする感覚が、言外に行間に伺われる一節である。

もう一つの特性は、吉野が、人間誰しもが有しているエゴイズムというものを、常に相対的にとらえようとしているということである。

自分を単位としたものより、人間全体を含むものを書くこととする吉野は、人間誰しもが生来有しているところのエゴイズムを絶対的にとらえることを非常に恐れ、自分のエゴイズムに気づき恥ずかしさを感じることに、究極的には、気がつくことに救いや許しを求めている。

他者になり変われることが、人として最も望まれるべきことであることを、吉野は詩作品の中においても、さりげなく主張している。例えば、「夕焼け」の少女がそのよい例である。吉野は主人公の少女に、老人のために二度まで席を譲るが、三度めは立つことができずにいる自分のエゴイズムの存在に気づかせ、恥ずかしさを感じさせている。夕焼けの次の一節は、吉野のエゴイズムに対する考え方

を、端的に表わしている。

やさしい心の持ち主は

いつでもどこでも

われにもあらず受難者となる。

何故って

やさしい心の持主は

他人のつらさを自分のつらさのように感じるから。

以上の二つが、吉野弘の根本を貫いている特色である。

第二章 国語教材としての吉野弘の詩

第一節 教科書における採択状況

吉野弘の詩は、現在、多くの教科書及び、県や市の教育委員会編になる書や、各種教科書会社の教師向け参考書などに、かなりの数で使用されている。以下、どのような教科書に、いつ頃から採択されていったかについて、列記していく。

① 「I was born」(第一詩集「消息」所収)

・筑摩書房—高校三年。昭和五十年から

・学校図書—高校三年。昭和五十六年から

(別に)—高校一年。昭和五十七年から

・第一学習社(広島)—使用学年、年次とも不明

② 「夕焼け」(第二詩集「幻・方法」所収)

・光村図書—中学二年。昭和五十年から

・教育出版—中学一年。昭和五十三年から五十五年まで

・旺文社—高校一年。昭和四十八年から

・NHK高校現代国語3—昭和四十二年から

③ 「奈々に」(第一詩集「消息」所収)

・三省堂—中学三年。昭和四十一年度から使用。四十七年度以降、

中学二年用。

・東京書籍—中学三年。昭和五十六年から

・日本書籍—中学三年。昭和四十七年から

④ 「雪の日に」(第四詩集「感傷旅行」所収)

・明治書院—高校一年。昭和五十七年から

⑤ 「生命は」(第五詩集「北入曾」所収)

・三省堂—高校一年。昭和五十四年から

・角川書店—高校二年。昭和五十八年から

⑥ 「移しい数の」(第七詩集「叙景」所収)

・学校図書—中学三年。昭和五十八年から

⑦ 「一年生」(第四詩集「感傷旅行」所収)

・三省堂—中学一年。昭和五十九年から

⑧ 「岩が」(第二詩集「幻・方法」所収)

・学校図書—中学二年。昭和五十八年から

⑨ 「素直な疑問符」(第三詩集「10ワットの太陽」)

・尚学図書—高校一年。昭和五十六年度から

⑩ 「比喩の太陽」(第三詩集「10ワットの太陽」所収)

・教育出版—高校国語教科書「現代文」。昭和五十八年度から

以上の国語教科書のほか、「山が」(第二詩集「幻・方法」所収)が、日本書籍の中学二年三年用のペン習字教科書に、昭和五十六年度から使用されている。

第二節 吉野弘の詩における教材的価値について

はじめに、吉野弘の詩が国語教科書に採択されていた年代を、順をおっていくことにする。

吉野の詩の中で最も早く採択されていたのは、第一詩集『消息』に所収の「奈々子に」である。この作品は、昭和四十一年に三省堂の国語教科書に中学一年用として、採択されたものである。

続いて年代順に作品を列記していくと、次のようになる。なお、()内はその作品が初めて教科書に採択された年度を示している。

「奈々子に」(昭和四十一年) 「夕焼け」(昭和四十二年)

「I was born」(昭和五十年) 「生命は」(昭和五十四年)

「岩が」(昭和五十六年) 「素直な疑問符」(昭和五十六年)

「山が」(昭和五十六年) 「雪の日に」(昭和五十七年) 「比

喩の太陽」(昭和五十八年) 「夥しい数の」(昭和五十九年)

「一年生」(昭和五十九年)

以上の作品の十一篇のうち九篇までが、吉野の現在までに刊行されている詩集の中でも、前半の第四詩集までから採られている。詳しくは、第一詩集『消息』から二篇、第二詩集『幻・方法』から一篇、第三詩集『10ワットの太陽』から二篇、第四詩集『感傷旅行』から二篇、第五詩集『北入曾』から一篇、第七詩集『叙景』から一篇ずつ採られている。

また教科書に採択されていた順番は、少々変則的ではあるが、作者の若い頃の作品から、つまり初期詩集から順々にとられていている。そして作品全般を見渡すと、作者二十歳代後半から五十歳代前半までと、およそ二十年に渡る詩作品の中から広く採択されている。

つぎに、吉野の詩は、小学校、中学校、高校の何学年において、どの程度採択されていたかについて、みてみることにする。なお()内の数字は、その学年において採択されている作品数を示すものである。

小学校六年(1) 計1

中学校一年(2) 二年(3) 三年(5) 計10

高校一年(5) 二年(1) 三年(2) 計8

以上の結果より、吉野の詩は、小学校から高校までの幅広い学年に渡って採択されていることがわかる。しかし概ねは、中学、高校

と、物事を考え始める、あるいは、考えている最中の世代に、重点的にとられている。

以上の資料から、吉野の詩がなぜ教科書に多く採択されるようになってきたのかについて、インタビューによっての作者自身の意見もまじえながら考察を加え、吉野弘の詩における教材としての意義、価値観をみていくことにする。

まず吉野弘の詩の教科書への採択理由であるが、第一にあげられるのは（作者自身も語っていたが）、吉野の詩には、生き方が絡んでくることが多いためではないかと思われる。

中学生になり、自分と他者との意識が高まり、自我に目覚めるようになってくると、様々なことに対して敏感に感じ始め、思索的になっていく。そして究極的には、自分の生き方に対して深い関心を寄せ、考えをめぐらすようになり始める。そういう時期に吉野の詩は、自分の生き方を考える機会を与えてくれるのではないだろうか。吉野自身も「自己を解釈する上での材料に使われる可能性があるからでは……」と語っていたが、まさにその通りであろうと思われる。

確かに吉野の詩には、△生▽をうたったものが多い。教科書に採択されている詩作品のうちでも、「I was born」や「生命は」などは、まさに△生▽そのものを主題としたものであり、他作品、例えば「奈々子に」や「雪の日に」、「夥しい数の」、「若が」なども、生き方が絡んできているところが見うけられる。

例えば、「奈々子に」の次の一節

唐突だが

奈々子

お父さんは お前に

多くを期待しないだろう。

ひとが

ほかからの期待に応えようとして

どんなに

自分を駄目にしてしまおうか

お父さんは はっきり

知ってしまったから。

や、「雪の日に」の次の一節

誠実が 誠実を

どうしたら欺かないでいることが出来るか

などには、さりげなく語りかけられている詩体の言外に、考えさせられる深い意味が隠されている。

第二に上げられるのは（これも作者自身が語っていたことであるが）、吉野の詩の特性の一つであるわがやすさのためではないかと思われる。

自分自身を「少年少女向け詩人」と呼び、「自分でわからないことは絶対に書かない」と語る吉野であるが、確かに吉野の詩は散文

的構成をとるものが多く、難解な語句や言いまわしは少ない。労働運動関係の詩の鑑賞をのぞけば、中学生や高校生にもなれば難なく読みこなせる詩体である。

現代詩という点、とかく難解で抽象的な表現形態を持つものが多く、生徒には敬遠されがちなジャンルであるが、吉野の詩の場合はそのわかりやすさにおいて、生徒もすすんで読んでいくことができると思われる。

そして最後に上げられるのは、吉野の詩の行間に伺われる生への肯定的な姿勢や、人間が本来有しているところのやさしさへの志向などのような、全体的なほのぼのとした向日性が、読み手（生徒）に与える効果を期待してのものではないかと思われる。

吉野の詩の根本を貫いている「上昇感覚」と「エゴの相対化」の二つの特性が、前述の生への肯定的な姿勢ややさしさへの志向の裏付けとなっているのである。

作品「I was born」や「生命は」などは、一個の生命はそのものだけのものでなく、他者との有機的なつながりによって存在するということをうたい、自分の人生Vだけではなく、他人の人生Vをも大切にしていこうとするやさしさが伺われる。それは次に示す作品「生命は」の中の一節が、端的に示している。

生命は

その中に欠如を抱き、

それを他者から満たしてもらおうのだ
世界は多分

他者の総和

また反面、作品「奈々子に」の中では、

ひとが

ひとでなくなるのは

自分を愛することをやめるときだ

自分を愛することをやめるとき

ひとは

他人を愛することをやめ

世界を見失ってしまう

自分があるとき

他人があり

世界がある。

とうたい、自分自身の生を大切にしなければ他人の生をも大切にできないとしている。

このように吉野の思想の根本が、詩の中にそしてその行間に滲み出て、詩全体をおおっているようである。

以上の三点が、吉野弘の詩が教科書に採択されていった、主な理

由となつてゐるように思われる。この理由をふまえて、吉野弘の詩における教材としての意義を述べていくことにする。

吉野の詩は、主に中学、高校の世代に与えることによって、自分の考え方の価値基準を暗中模索している状態から一步前へ踏み出すための手がかり、あるいは、日常性へ埋没してしまつて気づかぬにいたことへの、新たな発見につながるのではないかと思われる。

時に

風の如く

耳もとで鳴る

意味不明な訪れに

私もまた

素直にかしぐ 小鳥の首でありたい。

作品「素直な疑問符」の中に右記のような一節があるが、この一節が表わすように、吉野の詩は、人として持つべき本来のやさしさを考えさせる生き方を、純粹に示唆してくれるものである。

ここに私は、吉野弘の詩を教材として採り上げる重要性をみるのである。

第三節 「I was born」のモチーフ及びテーマ

次に、吉野弘の代表作の一つとして、「I was born」をとりあげる。彼はこの作品が書かれた頃のことについて、次のように語

っている。

(注2)
昭和27年の作です。何月かは不明です。発表されたのが昭和27年11月号『詩学』誌上ですから、作ったのは発表前、半年ぐらいの間だろうと思います。数え年27歳(満で26歳)、独り者の時で、「詩学研究会」(投稿欄)に送った作品の二つ目でした。

(中略)

制作の前々年(昭和25年)の6月と7月に、東京小岩の或る病院で胸郭成形手術を受けて右側の肋骨6本を切除されました。26年の3月、左側も切除される予定だったので、幸運にも切らずに済み、薬の服用だけで快方に向い、8月に退院して帰郷、元の職場に復職してしばらく半日勤務、27年に入って、一人前の全日勤務になりました。そのころの作品です。

こんな詩を書いた背景には、足かけ三年にわたる療養生活の日々があり、それに先立つ労働組合専従者期間と労働争議があり、更に先立つものとして、敗戦直後の精神的な打撃と混乱があり、病気が癒えたときは「敗戦で生き残り、病気で生き残ったのだから、これからは生きなくてはいけないのだ」という気がしていました。安堵と義務感に包まれていた病後の感懐が、母への追懐と重なったことが、こういう詩になったようです。

以上、引用が長きに渡ってしまったが、この作品の創作された背景から伺えるのは、吉野の八生Vに対する深い思い入れと、生きな

く・て・は・な・ら・な・い・と・いう・決・意・で・あ・る。そして、自分の生をみつめ直すという意味において、「I was born」を創作していったようである。

このように「I was born」は、言わば吉野弘の詩の出発点であり、吉野自身も「自分で書いたものに影響を受けた」と作品「I was born」について語っているがごとく、吉野の詩作の原点を有した作品であると言える。

以上のことから「I was born」創作における吉野の執筆動機は、直接的には三年間の療養生活の体験からくるものであるが、単にそれだけではなく、それに先立つところの労働争議や敗戦による精神的な打撃も絡んできていると言えらる。そして、人生に残るVという体験から、生きるを生きなくとはいけないという志向へ転じていかせたことが、吉野のこの詩に対する意図であるように思える。

ところで、この詩にはもう一つの動機と意図が隠されている。それは人生Vの問題である。

この人生Vについては、前述の人生Vに比べて作品中に表だって示されていないが、「I was born」の中では、人生Vと同じ程度のウェイトを有しているようである。それは、次に示す作者の言葉からも明らかである。

(注3) 唐突と思われるかも知れませんが、この詩の創作衝動の一つは、

人間の誰もが免れることのできない性愛に、親と子の間柄が絡んでくることのいたましさのようなものだったと思います。

このように作者は、「I was born」のもう一つの創作動機を明らかにしている。そして奥に隠された人生Vの領域について、作者は次のように裏づけている。

(注4) 身重な女の人の腹に胎児を透視して、「やっぱり、I was born なんだね」という少年は、女の性を通じて、その先

の男の性の働きかけを見えていますし、同時に、自分の生んだ父の性を見抜いています。

もともと、人生Vと人生Vは切り離して別々に考えることのできないものであり、表裏一体をなす関係である。吉野はこの詩を作った当時或る女性を愛していて、やがて結婚して人の子の親になるということを強く意識しており、

(注5) 一組の男女の關係が親子の關係に転ずるといふことに、なんと
も言いたい負い目をあらかじめ感じていたようです。

人の父になるといふことが現実になる前にそれを意識の上で先取りしておきたいという要求が私の内部に強く働いて、この詩を作ったように思います。

と記している。このことから明らかのように、人生Vに対して人一倍敏感になっていた作者は、一人の女性を愛することで、人生Vから人生Vの領域へ、その想いを近接させていったようである。な

んとなれば、△性▽は次の△生▽への深い関連を有したものである。この△性▽への近接感が、もう一つの執筆意図となっているように思える。

これらの動機及び意図が絡んで、作品「I was born」となっていたわけであるが、創作の直接的ひき金となったライトモチーフは、なんといっても、「I was born」という英文との出会いと、蜉蝣の卵の話の結びつきであろう。作者自身創作のモチーフとして、次のように記している。

モチーフは I was born という言葉そのものです。普段使いなれてる母国語では感じられなくなっていたものが、外国語の基礎的なきればしによって照らし出されたことです。

この展開を助けてくれたのが、大町文衛氏（大町佳月の次男にあたる方）の著書、『日本昆虫記』の中の「かげろう」の話でした。

以上のことから「I was born」は、病後における吉野の種々の想いが結晶となった作品と言える。

以上の動機、意図をふまえて、次にこの作品の主題について論じていくことにする。

吉野は、第一章でも論じてきたように、人の△生▽というものを不完全なものとしてとらえている。人はそれぞれにエゴを有した存在であり、またそれを人から奪ってしまったら、何も残らないと語

っている。唯に、自分のエゴに気づき、お互いのエゴを認めあうことに、救いを求めているようである。

作品「I was born」の場合においても、至らない△生▽が△性▽によって、またその至らない類似品をつくるというエゴに対する吉野の罪の意識が伺われる。そして吉野は、そのエゴを書くことによって、つまり我が子に糾弾される父親を描くことによって、△性▽から△生▽を生じていくに至らなさ、人としての至らなさを昇華していくようとしている。

また吉野は、十四歳の時に母を亡くし、長じて得た二番めの母もわずか一年足らずで亡くしている。この経験から母への追懐もありまてか、△生▽に対して負いめを抱き続けていたようである。しかしこの負い目は、蜉蝣の卵の生への盲目的な意志によって昇華されたのである。

以上述べてきたことからわかるように、「I was born」の中で吉野は、親として子に△生▽の由来を糾弾される立場と、自身△生▽に対する負い目を抱いた立場との両者にたっている。言いかえるなら、吉野自身も語るごとく、吉野は作品の中で子であり父であるのである。だが、この両者のどちらに吉野の姿を多く見ることができると問われたら、やはり父の方であろう。「I was born」は、清岡が『抒情の前線』の中でも述べているように、父となる吉野のこれからの課題が伺われる作品である。

このように「I was born」から伺えるのは、△生▽と△性▽

であり、△性▽は換言するなら△愛▽である。それは、愛する女性へのものであり、まだ見ぬ我が子へのいとおしみであろう。そしてこの△生▽と△愛▽が、作品「I was born」における主題といえる。

「I was born」は、△生▽という、わがままでとてつもないエゴを抱えた恥ずかしい一面と、またそれとは裏腹な、ありがたい恩恵を感じさせる一面との矛盾をはらんだものに対する、吉野自身の姿勢もしくは決意を表明したものである。

そして、新たな△生▽へのしかけとなっていく△性▽に対する父親としての罪の意識を示すことによって、生きていくことはすばらしいことであるが、容易ならぬものを抱えているという吉野の鋭い視点の伺える作品である。

— 注 —

- (1) 『現代の詩人たち△上▽』大岡信（青土社）
- (2) 『詩人会議』昭和51年11月号
- (3) 『現代国語3 学習指導の研究』（筑摩書房）
- (4) (3)に同じ
- (5) (3)に同じ
- (6) (2)に同じ

補記

吉野弘氏には、私の照会に対し、お忙しい中をたびたび丁寧なお返事をいただき、しかも、十一月二十日（昭和五十九年）に、東京のあるデパートのスカイレストランで、延々六時間もお話を伺った。思いもかけない好運であり、感謝の念にたえない。氏の奥深い思想や、散文詩に対する考え、大人の読者に氏の詩がどう受けとめられているかなど、研究すべく残された課題は多い。

なお、この原稿は、急な依頼により、やむを得ず卒業論文の本論の部分を抄出してつなぐという方法を取ったので、終始が整わなかったり、大事な部分が落ちたりしている恐れもあるうかと思われ、それが心残りではある。御指導をいただいた小谷博泰先生にお礼申し上げます。